

聖書:エペソ人への手紙2章1～5節

説教:恵みによる救い

はじめに

私が初めてクリスチャンという存在を身近に感じたのは、大学生のときでした。そのとき寮に住んでいたのですが、そこにクリスチャンの先輩がいて、あるとき「聖書を読むといいよ」と言われたことを覚えています。けれどもそのときはまったく関心がわかなかった。そんな私が、いまはクリスチャンと名乗っているのですから人生はまことに不思議です。みなさんも似たり寄ったりのところを通してきたでしょう。どうしてこうなったのか。今日はそのことを考えるために、三つに分けて話をしていきます。一つ目は、かつて私たちはどんなところを歩んでいたのか。二つ目は、今私たちはどのような者となったのか。そして三つ目は、私たちに深く関わってくださっているイエス・キリストについて。この三つです。

1 かつて私たちは

1) 死んでいた

そこでまず、かつての私たちについて。1, 2節にこうある。「さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」

ここで注目したいのは、私たちはかつて「死んでいた者であった」というところです。初めて教会に来られたかたはこれを読んで戸惑うかもしれません。「私はずっと生きています。死んでいません。」もちろん肉のからだのことで言えば、死んだわけではない。しかしここで言おうとしているのは肉のからのことではなく、霊的な話しです。からだはたとえ生きていても、霊的には死んだ状態であった。それがかつての私たちの状態だったと言っているのです。

2) 空中の權威を持つ支配者

具体的に見たほうがわかりやすい。そこで次に注目するのは「空中の權威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊」というところです。空中の權威を持つ支配者とは何者なのか。最近SNSなどで「闇の政府が世界や日本を支配している」というようないわゆる「陰謀論」を唱える方がいます。確かに似ているところはあり

ますが、根本的に違う。陰謀論は、大きな力を持った悪い人たちが私たちをだまそうとしている。そんなわかりやすい図式で捉えて説明します。ところが空中の權威を持つ支配者のほうがもっと恐ろしい。というのは、私たちにわかりにくい形で働きかけてくるからです。実に巧妙に入り込んでくる。

3) 肉と心の望むことを行っていた

いったいどんなふうに働きかけてくるか。3節の途中にある。「自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行う。」これです。でも多くの方は、肉と心の望むことをおこなってそのどこが悪いのかと言うでしょう。やりたいことを自由にやれる、欲しいものがあれば自由に手に入れられる。それが人間の幸福である。もちろんそのことが問題なのではない。問題なのは、欲望には際限がないということです。「もっともっと」と言って独り占めする。他人のことよりも自分だけよければよいということになる。これが空中の權威を持つ支配者の働きです。その結果どうなるか。

4) 御怒りを受けるべき者であった

3節後半。「ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」御怒りを受ける理由は何か。たとえば、ほかの人が困っているのを見ても心を痛めることもなく、まったく関わろうとしない。そうやって自分のことしか考えない態度こそが、御怒りを受ける理由だということです。私はかつてそのような生き方をしてきました。

2 いま私たちは

1) 生かされている

そんなふうにして私たちは霊的に死んでいました。ところが5節にあるように、いまは生きる者となりました。なぜでしょう。私たちが何か善いことをしたからでしょうか。そうではない。4, 5節をまとめると「神は、生かしてくださいました」となる。私たちがなにかをしたのではなく、神の側からの一方的な働きだと書いてある。

2) 神のあわれみと愛によって

そもそも神と私たちの関係はどのようなものでしたか。先ほど見たとおりです。私たちは生まれながらに御怒りを受けるべき子らでした。敵対関係です。そんな関係だったのに、なぜ神は私たちを生かしてくださるのか。ここに、あわれみ豊かな神とか、大きな愛のゆえに、とあります。神はあわれみ深く、愛に満ちておられるから。

例えばこんなことでしょうか。悪いことをした子どもを父親が厳しく叱り、体罰を加えているという場面を想像してみます。母親はそれを見て、子どもをかばいながら父親に向かい、「もう赦してあげてください。打つなら私をぶってください」と言いながら子どもの代わりに謝る。今なら虐待とかDVとか言われかねませんが、かつての古い日本ではありそうな場面です。この親子の姿と神のお姿。似ているところがあります。しかし違うところもある。

3 キリスト

1) とともに

鍵となるのは5節の「キリストとともに生かしてくださいました」というところです。ここに大切なことが二つあります。一つ目はキリストが死んでくださったということ。先ほど一組の親子の話をしました。私たちは肉と心の望むところをやりたい放題にやっていたので、神は私たちに怒りの拳を振り下ろそうとしていました。そこへキリストという方が割って入ってくださって、「この子どもを打つ代わりにわたしを打ってください」と言われ、十字架で身代わりとなって死んでくださいました。私たちもかつて死んでいた者でしたが、キリストも同じように死んでくださいました。これが「キリストとともに」の一つ目の意味です。

そして二つ目。けれどもただ死んでくださっただけなら、あわれな親子の悲しい物語で終わりです。その先に何の希望もありません。大切なのは「死んだキリストを生かしてくださいました」というところです。何度も言いますが、キリストはご自分の力でよみがえられたわけではありません。父なる神がキリストを生かしてくださいました。このことについてパウロは別の箇所でこう言っています。「神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます。」（第一コリント6章14節）キリストとともに生かされていく。キリストがよみがえられたのだから、私たちも同じようによみがえりのいのちをいただくことになる。これこそが私たちの本当の希望です。

2) 恵み

さて最後に考えます。かつて死んでいた私たちでした。そんな私たちを、なぜ神はキリストとともに生かしてくださいましたのでしょうか。私たちが何か善いことをしたからでしょうか。善いことをしたからそのご褒美にいただいたというのなら、それは恵みではありません。恵みというのは、そんな資格が一つもないのにいただくことを言う。

この恵みをみなさんは日々味わっておられるでしょうか。救われたときは感激で一杯で、神の恵みを感じていました。では今はどうでしょうか。心のうちに感謝ではなく、むしろ不平不満が黒雲のように渦巻くということはなかったでしょうか。私は一生懸命こんなことあんなことをしたのに、問題がいつこうに解決しない。私は何も悪いことをしていないのに、どうして私だけが責任をとられるのか。考えてみれば、私たちの人生はさまざまな理不尽なできごとにあふれています。不平不満の種はいっぱいあります。ではキリストはどうだったのでしょうか。罪人のために身代わりとなって死んでいく。これ以上の理不尽な話はありません。にもかかわらずキリストはご自分を犠牲にして、死にまで従われました。そうして私たちに救いの恵みを届けてくださいました。

ですから思い出してみましょう。かつて自分はどんなところにいたのか。神の御怒りを受けて死んだ者だったのです。それがいまこうして救われて生かされている。これほどの大きな恵みをいただいていた。ところが私たちの目はかすんで見えなくなっている。神のすばらしい力が働いているはずなのに、感覚が鈍って感じなくなっている。

恵みがなくなったわけではありません。いつも目の前にあるのです。御霊が心の目を開いてくださいます。そうして恵みが見えていくなれば、私たちの口から神への賛美がこぼれ出ていきます。そのように働きかけて下さる主とともに歩んでまいります。